

「終わり」の歩き方

(ピリピ四・四〜七)

時は一九三〇年初夏のこと。とある神学校で「事件」は起こった。主の再臨が今すぐにでも来るのではないかと考えた学生の一部が何と神学書や冬服を焼き捨てはじめたのである。彼らは口々にこう言ったそうである。

「冬服はいらない」と。冬が来る前に主イエスは来られる。彼らは本当にそう考え、信じ、上記のこゝを実行したのである。しかし今日は二〇一五年一月一日だ。再臨は彼らが望んだ様には来なかったのだ。かの日冬服を全部焼き捨ててしまった学生たちは一体どうやって冬の寒さを防いだのだろうかと要らぬ心配をしてしまう。

閑話休題。今朝の個所にはピリピ教会に対するパウロの命令が書かれているのだが。その真ん中に「主は近い」という原文ではたった三語から成るセンテンスが置かれている。つまりこの個所にある命令は主が間もなく来られることを前提して書かれたものであると言える。以下、終わりの日にあたって私たちはどのように生きるべきかを考えてみたい。

一、主にあつて喜ぶ

ピリピ人への手紙は「喜びの手紙」とも呼ばれているが、僅か四章の手紙の中に「喜び」や「喜ぶ」という単語が一六回も用いられていることを考えると、もつともなことである。しかしこれはパウロやピリピ教会が自然に喜べるような状況にいたことを意味しない。パウロは入獄の憂き目にあい、命の危険にさらされ、半ば殉教を覚悟しつつこの手紙を書いている。またピリピ教会には外からの迫害に加え、内側ではリーダー達に不和があつた。しかしパウロはなお彼らに「喜べ」と命じているのだ。そう考えるとこの命令を実行するためにはこの地上における「喜び」探しでは十分ではないことがわかる。ではこの命令は不可能なのか。断じてそうではない。なぜならパウロはこの命令の前に「主にあつて」というフレーズを入れているからである。私たちの主はとこしえに変わらない真実な良いお方である。その主なる神の内には救われ、愛されている時、私たちの心には決して尽きることのない喜びが溢れてくるのである。

二、人にやさしくする

ここは主な日本語訳では「寛容」と訳されている。また「寛容」ということは「よ

く人を受け入れること」とか「許すこと」といった少しく受身のニュアンスをもっている。しかし原語ではもう少し積極的な意味を含んでおり、現に英訳の聖書では「優しさ」や「親切さ」を現す gentleness が用いられている。主にある「喜び」、救いの「喜び」はその人の人生を神中心のものに変化させる。そういう人は自我の奴隷ではないから、自分の意見に固着することはない。寧ろ神の国のためとあらば自己の権利を進んで放棄し、他者を喜び受け入れるという、より高い自由に生きるのである。主の来臨の近い今、私たちは御国の市民として、この他者に対する優しさに生きることが求められているのである。

三、思い煩わずに祈る

第三の命令は今度は「主は近い」の後に来る「思い煩わずに祈る」ことである。しかしこの世に思い煩いのない人というのはないか、居たとしても墓場の住人くらいではないかとも思われる。それぐらい人間ではよく思われたいと思つては悩み、背伸びをし過ぎてよくよし、生かされている事実を忘れて尊大になり、自己責任だということばに脅かされ、絶望的になってしまう生き物である。しかし、クリスチャンは霊的に、上から生まれた者であるから、例え四面楚歌のような状況に置かれたと

しても思い煩う必要はない。なぜなら良き神の居られる「上」はいつもあいているからである。必要なのは只一つ。古いブラック・ゴスペルの歌詞にある通りに祈りと言う電話番号(ー)をプッシュしてやるだけ。その時人は神の、即ち人知を超えた平安を必ず得ることが出来るのである。

* * *

「その日、その時は、だれも知らない。

天の御使いたちも、また子も知らない。ただ父だけが知つておられる(マタイ二四・三六)」これは終末の時に關するイエスの教えである。しかし神のひとり子のイエスさえ知らないと言っているにも関わらず、世界の情勢や天体の運行などから終末の日を割り出そうと試みる者が後を絶たない。実際ここ一年は二〇一四年九月から今年の九月迄に何らかの終末的な出来事が起こると言うニュースがネット上を駆け巡っていた。残念なことである。もう一度言う。来臨が近いという確信に基づきパウロが教会に求めたのは「その日」が何時かを天体の運行や様々な曆法に基づいて計算することではなく、上からの喜びに生き、良き人となり、祈り深くあることだった。このことを今一度起こしつつ再臨の備えを続けて行こう。マラナ・タ!